

戦争と平和 人類永遠の難題と希望

【CONTENTS】

コラム:戦争と平和……………P.2~3

執筆/川瀬(和)先生・ウンジャ先生・谷口先生

来・ぶらり……………P.4

学生選書ツアー2022を行いました!

宮崎公立大学附属図書館



学生 インタビュー

今回初めて学生選書ツアーに参加した学生3名にツアーの感想や図書館の普段の利用方法についてインタビューしました

質問内容

- ① 選書ツアーに参加しようと思った理由を教えてください。
- ② 選書ツアーはいかがでしたか?
- ③ 選書のポイントを教えてください。
- ④ どのような時に図書館を利用していますか?
- ⑤ 皆に教えたいと思う、図書館のおすすめの場所や使い方を教えてください。



3年 吉田 瑞姫さん

- ① 好きな本を他の学生さんに紹介できる点に魅力を感じて参加しました。
- ② 沢山の本がある中から、お気に入りの1冊を見つける作業が楽しかったです。宝探しのようでした。
- ③ 本に親しみが無い人にも手に取ってもらえるよう、分量が少なめで読みやすいと感じる作家さん・文章の本を中心に選書しました。
- ④ よく利用するのは個室研究室です。集中して課題に取り組む時に利用することが多いです。
- ⑤ 展示スペースが好きです。読む本が決まっていなかった時に参考にしています。



3年 大谷 夏さん

- ① 前回の募集が終わった後に友人からツアーのことを聞き、参加すればよかったと思っていたので、今回申し込みました。
- ② 2万円分あつという間に選んで終わるかと思いましたが、例えば文庫本だったら結構な量が集められるので、本好きの人には贅沢な体験だと思います。
- ③ ビジネス本や自己啓発の本を中心に、自己肯定感を上げたり自分磨きの参考になるような本を選びました。
- ④ 大学の課題やレポートの参考文献を探すことが多いです。先生のおすすめリーディングリストから選んだりします。
- ⑤ ブラウジングホールをよく利用します。定期的に新しい雑誌が入るので読みに来ています。



2年 高橋 奈々恵さん

- ① 迷っていましたが友人の誘いもあり参加を決めました。2万円分の選書はなかなか出来ない体験だと思います。
- ② 自分が欲しいと思った本を直感で手に取りながら、自由に本を選んで幸せでした。
- ③ 本の表紙や、最初の文章を読んで良いと思った本、好きな作家の方の本です。皆さんに読んでもらいたいです。
- ④ 主にレポートを書いたりする時に利用しますが、時間がある時にフラッと立ち寄って読みたいものを借りることも多いです。
- ⑤ 集中したい時は閲覧室、授業の合間など時間がない時はブラウジングホールと使い分けています。

2023年度も開催予定です。皆さんの参加をお待ちしております!!

本学の3専攻から、テーマにちなんだ当館所蔵の図書を紹介します。

戦争と平和～人類永遠の難題と希望～

言語・文化専攻 人文学の本質と語学を修得

准教授 川瀬 和也 (専門：哲学・倫理学)



「戦争の悪さ」を分析する

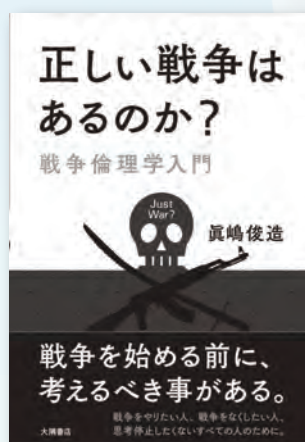
「戦争はなぜ倫理的に悪いのか？」を明らかにしようとする分野が戦争倫理学です。「そのようなことを問うこと自体が不謹慎だ」とか、「たくさんの人が殺される戦争は悪い、その理由など問うまでもない」と感じる方もいるかもしれませんが、しかし、戦争が「倫理的に悪い」と言われるときの理由を考えることは、未だ戦争がなくならない現代を生きる私たちに必要です。

残念ながら現実になってしまった例で言えば、ロシアによるウクライナへの侵攻は、明らかに「倫理的に悪い」と言えるでしょう。それでは、ウクライナが侵攻を防ぎ、領土を奪還するために武力を行使することはどうでしょうか。これは全く悪くないのでしょうか。それとも、やはり戦争であるという点においては「倫理的に悪い」のであって、仮に絶望的な状況であっても、話し合いによる解決を目指すことが倫理的には正しいのでしょうか。他の例で言えば、核兵器、毒ガス、対人地雷、クラスター爆弾のような特定の兵器は「非人道的兵器」とされます。しかし、なぜ等しく殺傷を目的とする兵器が、「非人道的」なものとならないものに分けられるのでしょうか。さらに別の例を挙げれば、なぜ病院を攻撃することは基地を攻撃することより悪いのでしょうか。

日本の安全保障や平和憲法について考えるためにも、戦争やそれに準ずる事態の「悪さ」について議論することは必要

です。安全保障を巡っては、「集団的自衛権」や「反撃能力」の行使の是非がしばしば問題となります。このとき、「正当な武力行使」と「不当な武力行使」は区別できると前提されていますが、その区別はどのようになされるべきなのでしょう。兵器の輸入や輸出の是非が議論されることもありますが、この問題も倫理と切り離せません。過去に目を向ければ、二度の原爆投下や、第二次世界大戦における日本軍の行動の「倫理的悪」についても考え続けなければなりません。

これらの切実な問いについて考えるには、「戦争の悪さ」の理由について、よりきめ細かな理解がどうしても必要です。そのための入門書である本書は、世界情勢や安全保障、平和構築について議論を深めるためにも、必読の一冊と言えるでしょう。



〈閲覧室：391.1 || Ma32〉

「正しい戦争はあるのか？—戦争倫理学入門」
眞嶋俊造著／大隈書店

メディア・コミュニケーション専攻 メディアと人間の社会行動を研究

助教 ラスルマナナ ウンジャニエン ミアニン ハリス
(専門：データサイエンス)



教育と平和の関係性を考えてみましょう！

一般的な人々が教育へのアクセスを広めることができれば、世界中でより平和を達成することができるというのが仮説である。しかし、この仮説は平和と教育に関する先行研究で議論されている。多くの著者は、教育そのものは平和をもたらす、戦争を止めるのに十分ではなく、場合によっては憎しみを助長し、紛争の持続をサポートする可能性がある」と主張している (Kumar, 2018¹; Burde, 2014²)。欧米諸国や日本などの先進国を見ると、第二次世界大戦後、確かにそれらの高学歴の国では戦争がなかった。一方、識字率が50%にも達しないような低学歴の国の歴史を見ると、戦争の犠牲になっている国がまだまだたくさんある：1990年のルワンダ、1955年のベトナム、インドとパキスタンの戦争など。だから、教育こそが世界平和の鍵だと思われるかもしれない。しかし、25年以上続いたスリランカの市民戦争のような最近のイベントは、学校教育や識字率が近隣諸国よりはるかに進んでいる(識字率90%以上)にもかかわらず、そうではないことを証明しているのであろう。

これらのイベントからのレッスンは、教育を社会の集団的信念と切り離して考えることはできないということである。教育が平和を促進させたいのであれば、歴史に関する知識の層がいかに深く学校での学習に影響を及ぼしているかを認識することが必要である。学校が社会的分裂、不寛容、偏見を強化するために使われるようでは、平和は実現しない。学校では相互の信頼を深めることを目的とするのが重要である。そうであってこそ、教育が平和を促進する可能性を持つのである。

パキスタンのように、世界の多くの国では、テロや戦争、紛争によって、子どもたち、特に若い女の子たちが学校に行くこと

ができなくなっている。そして、学校に行っている子供は、自分たちの教育がねじ曲げられるケースが多い。本書では、少女への教育を促進したため、銃殺されそうになったパキスタンの少女、マラさんの物語を語る。読みながら、貧しい国々で教育を奪われ最も苦しんでいる幼い子どもたち、特に少女たちに、偏りのない良い教育を与えることの大切さがわかってくるであろう。最終的には政府や国のリーダーが自国の教育政策を決定することは確かだが、政治的・宗教的な偏見にとられず、一人ひとりが正しいバリューを理解することで平和が訪れると信じている。マラさんはまだ子供でありながらもそのことを理解しており、彼女の物語は感動的で、読む価値のあるものである。なので、みなさん、楽しんでお読みください！

参考文献：
1. Kumar, K. (2018). Can Education Contribute to Peace? UNESCO.
2. Burde, D. (2014). Schools for Conflict or for Peace in Afghanistan. Columbia University Press.



〈閲覧室：289.2 || Ma99〉

「武器より一冊の本をください」
少女マララ・ユスフザイの祈り
ヴィヴィアナ・マツツア著／金の星社

国際政治経済専攻 世界の政治経済を多角的に研究

教授 谷口 美代子 (専門：国際政治・紛争平和研究)



緒方貞子氏が遺したもの

国際社会において、どのように平和を実現をできるのか。これは、第一次世界大戦の反省を踏まえて発展した国際政治学の中心命題である。第二次世界大戦後、リベラルな国際秩序のもとで国連を中心とする国際平和の制度化が進んだが、ポスト冷戦後に国際社会が直面したのは「新たな戦争」(＝民族紛争)への対処だった。そして、2022年2月、ロシアによるウクライナ侵攻が始まったが、その収束の兆しは見えない。このように、残念ながら、人類は国際政治学の中心命題の「解」をいまだに見いだせていない。

こうした国際政治の現実を踏まえ、ここでは、ポスト冷戦期という歴史の転換期で活躍した日本人女性のアイコン的存在である緒方貞子氏(2019年死去)の回顧録を紹介する。

緒方氏の肩書は多様である。国際政治学者(大学教員)、国連人権委員会日本政府代表、国連難民高等弁務官、アフガニスタン支援政府特別代表、国際協力機構理事長などである。それだけではない。曾祖父は戦前の首相だった犬養毅。祖父、父とも外交官。本人は帰国子女。結婚後は仕事と家庭を両立させ2人の子どもを育て上げた。非常勤講師などを経て48歳で国連公使としてニューヨーク勤務。前職を聞かれた時には、「台所からきました」といつのけた。

ポスト冷戦期の文脈から、緒方氏の最大の功績といってもいいのは国連難民高等弁務官として湾岸戦争に伴うクルド人難民の対処である。1990年に弁務官に就任してから2カ月後、当時、国連高等弁務官事務所 (UNHCR) の保護対象ではなかった国内避難民の支援を決断し、その後、15キロの防弾チョッキを身に付けて危険地域を視察し、多くの命を救った。こうした経験から、人間の保護に焦点をあてる「人間の安全保障」の概念を提唱した。これは、日本の外交方針に

もなっている。

緒方氏は常に底辺にいる一番苦しんでいる人びとに「寄り添う」姿勢を持つ人道主義者であった反面、紛争当事者には解決の政治的意思を求める「手ごわい交渉人」、時に冷徹なリアリストとしても知られた。その背景には、国際政治学者としての知的訓練の所産がある。カリフォルニア大学バークレー校に提出した博士論文は、日本が戦争に向かう発端となった満州事変の政策決定過程についてであり、その後も多くの研究成果を残している。緒方氏は、実務でもアクターの動きを国際情勢の中に位置付けて思考するというこの政策決定過程の分析手法を活用したと述べている。

晩年、何度か緒方氏にお目にかかる機会に恵まれた。国際舞台で活躍された緒方氏が最も思いを寄せておられたのは、意外にも日本の行く末だった。資源の乏しい日本が生き残るには開かれた社会でなくてはならない、内向きになってはいけないと、温かい眼差しで熱く語られた。

こうした意味で、本書は、混迷を深める国際情勢の中で、次世代を担う若い人への指南書ともいえる。



〈文庫コーナー：289.1 || O23〉

「聞き書 緒方貞子回顧録」
野林健・納家正嗣編／岩波書店